

Title	受験雑誌・進学案内書にみる近代日本における予備校
Sub Title	The yobikos in modern Japan described in the magazines on the entrance examination and the guidebooks on the advanced schools
Author	吉野, 剛弘(Yoshino, Takehiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2006
Jtitle	哲學 No.115 (2006. 2) ,p.89- 114
JaLC DOI	
Abstract	Among a lot of means of preparing for the entrance examination, preparatory schools for the entrance examination (yobiko) developed in modern Japan. This paper investigates the comments on this kind of schools described in the magazines on the entrance examination and the guidebooks on the advanced schools. 1-year preparatory schools came into being in 1900 s. A number of students went to this kind of schools, nevertheless they were recognized as profit-making schools and assemblies of the failures, that is as necessary evil. As the entrance examination became harsh, preparatory schools were accepted and considered as the best way to the passage of the entrance examination. In 1930 s supplementary courses (hoshu-ka) of the middle schools were taken notice of as a new type of preparatory schools, though from Meiji era on this course was one of the means of preparing for the entrance examination. The rise of supplementary courses signified the decline of the old rude preparatory schools and the beginning of the control in the preparatory education. This control included the regular presence at the lectures and the continuous guidance from the teachers.
Notes	特集教育研究の現在-教育の統合的理解を目指して- 教育史 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000115-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投稿論文 —

受験雑誌・進学案内書にみる 近代日本における予備校

— 吉 野 剛 弘* —

The Yobikos in Modern Japan Described in the Magazines on the Entrance Examination and the Guidebooks on the Advanced Schools

Takehiro YOSHINO

Among a lot of means of preparing for the entrance examination, preparatory schools for the entrance examination (yobiko) developed in modern Japan. This paper investigates the comments on this kind of schools described in the magazines on the entrance examination and the guidebooks on the advanced schools.

1-year preparatory schools came into being in 1900 s. A number of students went to this kind of schools, nevertheless they were recognized as profit-making schools and assemblies of the failures, that is as necessary evil. As the entrance examination became harsh, preparatory schools were accepted and considered as the best way to the passage of the entrance examination.

In 1930 s supplementary courses (hoshu-ka) of the middle schools were taken notice of as a new type of preparatory schools, though from Meiji era on this course was one of the means of preparing for the entrance examination. The rise of supplementary courses signified the decline of the old rude preparatory schools and the beginning of the control in the preparatory education. This control included the regular presence at the lectures and the continuous guidance from the teachers.

* 東京電機大学情報環境学部専任講師（日本教育史）

はじめに

入学試験は、近現代の日本の学校制度と分かちがたい存在である。その功罪についてはさまざまな考え方があるだろうが、入学試験が近現代の日本の学校制度と分かちがたく存在してきたという事実そのものを否定することは困難である。

さらにこの入学試験は、受験準備教育を専門的に担う予備校の存在をも要請することになった。予備校とは、入学試験に失敗したために次年度の試験の準備を行う教育機関、あるいは初めて受ける入学試験の準備のための教育を行うための教育機関ということになるが、これは必ずしも存在しなければならないものでもない。なぜなら、受験競争の激化は何らかの受験準備を要請することにはなるだろうが、それは特別な教育機関で行わなければならないものではないからである。歴史的経緯からいえば入学試験の存在が予備校を要請したことにはなるが、それは論理的必然として生じたものかとなると留保が必要である¹⁾。

実際問題として、予備校に行かず独学で入学試験を突破する方法を指南した書籍もあるし、また苦学して受験に臨もうという者たちには決して安くはない授業料を徴収する予備校は縁遠いものだっただろう。また、入学試験では基本的に下級学校で学んできた内容が問われるのだから、特段新たな何かを学ぶ必要はないとさえいえる。しかし、予備校は発展の道を歩んだ。独学を含めた数ある選択肢の中から予備校を選んだ受験生が一定数いたということは、そこには受験生を予備校にいざなう何らかの要素があったとみるべきであろう。

もちろん受験生を予備校に向かわせた大きな理由は、受験技術の習得ということにあるのだろう。しかし、当時であっても受験参考書も存在していたし、受験雑誌では各教科の学習法や内容に関する連載が掲載され、また雑誌によっては誌上添削のようなことも行われていたのだから、独学に

よる受験準備という選択肢は確実に存在していたことになるし、多くの予備校は東京にあったという事実からしても、予備校には行かずに受験技術を身につけるという方法は、ひとつの選択肢として十分成立していたはずである。では、いかにして予備校は容認され、受験社会の中に定着していくようになったのか。

予備校がどのように誕生し、また発展をとげていったのかということとは、その実態を仔細に検討すれば解明可能ではあるし、これまでも少ないながらも研究は存在している²⁾。しかしながら、その実態の解明にあたっては、史料的な制約などの多くの問題を抱えていることも事実である。その意味でいわゆる従来の実証史研究とは若干異なる軸を導入した上で、実証史研究と重ね合わせることで全体像の描出を試みるということが必要であると考ええる。

そのような問題点を抱えている中で、受験雑誌と進学案内書における予備校についての言説を分析することは大きな一助となろう。進学案内書の書誌的分析を進めている菅原亮芳は、「『案内書』の著者たちが著名人ではなかったため彼等の経歴がつかめないこと、『案内書』の普及範囲が必ずしも把握できないこと、商業主義的傾向が強い点」³⁾などが進学案内書を用いる上での問題点であると指摘している。もちろんこれらの問題点があることは事実であるが、そこでの予備校の語られ方は当時の予備校に対する意識をある程度反映していると考えられるのであり、それゆえに受験雑誌や進学案内書の言説が実際の受験生の動向にある程度影響を与えていることを否定しすることは困難であろう。そのようなことをふまえつつ、本論文では受験雑誌や進学案内書において予備校がいかに語られてきたかの変遷をたどり、その言説史と実態史と重ね合わせることで、近代日本の受験における予備校の存在を位置づけることにしたい。

なお、本論文執筆にあたって、受験雑誌としては『中学世界』、『受験と学生』、『受験旬報（のち蛍雪時代）』を調査し、進学案内書については菅

原亮芳「近代日本私学教育史研究(1)-(6)」(『日本私学教育研究所紀要』第32号-第37号(1996-2001)所収) および同「日本の「私学」教育に関する一試論」同前38号(2002)所収)の進学案内書に関する情報をもとに、それらに筆者が独自に調査したものを使用した。

1. 明治後期における予備校評

修業年限が1年の受験準備教育機関が出現するのは、明治30年代頃のことである。この頃の受験準備教育機関を後の時期の予備校と同一視することには制度的な意味において若干の問題があるが、受験準備教育を受ける側の視点に立てばそれは大きな問題ではない。予備校に関する論評が出始めるのは明治30年代後半に入ってからのことであるが、以下に示すのは『中学世界』に掲載された予備校に関する論評である⁴⁾。

◎こういふ風に入学試験が六ヶ敷くなつて、学生が困つて居るから、受験法だとか、受験案内だとか、受験問答だとか、答案のかきかたとかいふやうなものも沢山出来、受験者のために設けられた、受験予備校ともいふべきものも沢山出来た。

◎これらは受験者のためには便利ではあるが、著作者や学校も亦儲けているから、一挙両得といひたいが、中には月謝を目宛てに立てた、不親切な学校もあるから。学生諸君も、父兄諸君も、大に注意しないと、馬鹿な目に遇ふことがある。注意したまへ⁵⁾。

錦町では正則予備校、正則英語学校、国民英学会、中央大学の高等受験科、錦城中学の高等予科。猿楽町辺では、数理学館、研数学館、大成学館内の受験科。其他、駿河台に明治大学の高等予備科もある。連雀町に開成の高等予科もある。此等の諸学校が、雲の如き受験学生の為に、或は「徴兵猶予」の特典あることを吹聴し、或は教員の欠席なきを特色

とし、或は山的問題の特別伝授を楯とし、極度迄門戸を開放して、多大の便宜を与へて居るのである⁶⁾。

これらの論評では予備校の存在そのものの出現は説いているものの、その評価は厳しい。「著作者や学校も亦儲けているから、一挙兩得」とか、「中には月謝を目宛てに立てた、不親切な学校もある」といった文面からは営利主義的な学校にすぎないという発想がありありとしているし、「山的問題の特別伝授」という表現もいかにも受験準備教育機関は怪しげな教育を行っているという印象を与える。当時の学校教育の水準と入学試験の水準を比較すると、このような否定的評価を下してばかりもいられない側面もあるし、これら2つの論評が掲載されている『中学世界』には予備校の案内の記事さえ掲載されているのである。しかしながら、その予備校の評価自体はせいぜい必要悪という程度のものでしかなかったのである。

そのような評価も若干の好転を示すことになる。以下に示すのは同じ『中学世界』の1908（明治41）年の増刊号における「高等予備校」の記事である。

◎そこへ、入学試験の準備にはこゝが一番だ、こゝから出た者は何人入学した。こゝで戦闘準備をすれば必ず入学出来る。と学生を迎へるのが、高等予校である

◎学生は又吾先にと走せ参じて、忽ち満員になるといふ有様で、受験界には初陣の中学新卒業生もあればすでに数回の戦場に臨んだ敗軍の将もある実に玉石混交といふべきだ。

◎其玉石混交の中から、僅か二三ヶ月の中に、幾多の名玉が顕はれるのだから此学校は受験界には是非なくてはならぬものといふてもよい。

◎それで此学校に入るものは、兎にも角にも、立派な中学卒業生ばかりで、他の入学者はないから、別に六ヶ敷い入学資格もない。

◎されば、此種の予備校も沢山あるが、学校の目的が同じで、入学者の目的も同じであるから、競ふて良講師を求め、試験時期には、何れも満員札を掲げてあるが、試験期を過ぎれば、忽ち門前雀羅を張るといふ光景である⁷⁾。

「玉石混交の中から、僅か二三ヶ月の中に、幾多の名玉」を生み出し、「受験界には是非なくてはならぬもの」という評価それ自体は、先にみた論評よりも肯定的ではある。しかし、そうであったにせよ「試験期を過ぎれば、忽ち門前雀羅を張る」学校なのである。もちろん当時の中学校は3月卒業で、高等学校は9月入学であったから、入試が終わってから中学校を卒業したばかりの者が予備校に入るまでの期間の予備校は、浪人生だけしかいないことになる。しかし、この頃にあっても浪人生は多く存在したのだから、本当に「門前雀羅を張る」状況だったのかは疑問の残るところである。

このような低い評価は『中学世界』に限ったことではない。以下に示すのは明治40年代の進学案内書にみられる予備校評である。

(二) 高等予備(原文△傍点あり) 高等予備校は、吾人之れを落武者の落合所、また一名之れを出陣前の練武所と名づく。落武者の落合所とは、ずいぶん酷なる称呼ではあるが、しかし事実上来る者も来る者も、落ちに落ちたる者ばかりであるから、斯く云つても仕方がない。一面より云へば、高等予備校は斯くの如き状態なると同時に、又一面より之れを云ふ時は、実に勇ましき出陣前の練武所で有る。男兒郷関を出で、立志の決心鉄よりも堅く、志若し遂げずんば死すとも帰らずの精神は、いかに雄々しく勇ましきものではないか。さはれ、幾回かの失敗は遂に鉄心も挫け易く壮図も乱れやすし、もし此の種の学校に学ばんとする者は、宜ろしく遠謀深慮を廻らし、確実なる勝算ありて初めて入る

べきで有る。彼のあたら青年時代の数年を受験の為に空費し、しかも目的の学校に入るを得ずして、終生の方向を誤まる者の如きは、受験の渦中に投ずる前に当り充分の成算なくして、漫然成功の岸を目ざしたるの罪である。是に於いて、吾人は巻中の幾箇所かに於て暗示せし注意を繰り返し、実力なき者は無謀の企てをなすなと警告して置く。

凡そ受験準備の学校は二種類ある。即ち其の第一種は純粹の受験予備学校、第二種は普通の中学校に受験準備の臭味を加味したものである。此の事は、すでに第一篇に於て記述する所があつた。純粹の受験準備の学校とは、即ち高等予備学校、及び之れに類似の学校で有る。高等予備学校及び之れに類似の学校は、一般に良講師を有するを常とし、また従つて受験に関する奥義を授かるの便宜がある。故に若し、入学試験の期日まで自宅若くは中学の補修科等にて復習をする余裕のあるものは、充分勝算の見込立ち居れば兎に角、左もなくば受験専門の学校たる高等予備学校に入るが寧ろ得策である⁸⁾。

「入学試験の期日まで自宅若くは中学の補修科等にて復習をする余裕のあるものは、充分勝算の見込立ち居れば兎に角、左もなくば受験専門の学校たる高等予備学校に入るが寧ろ得策」という表現から、予備校の存在は自宅による学習や中学校の補習科での受験準備より優れた受験準備法としてとらえられていることが分かる。しかし、受験に臨む以上入念な計画を立てねばならず、「実力なき者は無謀の企てをなすな」ということからして、そもそも高等学校入試に臨むということは限られた人間の話であるということである。もちろん現実問題としてそれは何ら間違つた話ではないが、予備校が新たな希望を切り拓くものではなく、あくまで限られた人間に対してあと一步の後押しをするにすぎないという意味では、予備校の信頼度も高いとはいえない。また、予備校へ入ることが得策とは言いつつも、「落武者の落合所」であるということと言及することなしにそのような肯

定的な評価が出てこないということも指摘しておきたい。

明治30年代頃に受験準備を主とする機関が登場してきたわけだが、この時期の予備校はすべてが受験指導だけを目的に新たに設立された学校だったわけではない。この時期の受験準備教育機関のひとつに中学校の補習科をあげることができる。以下に示すのはこの補習科に関するものである。

○東京の中学には、大抵補習科がある。地方にもないことはないが、あった処で生徒は少ない、東京の中学補習科は、皆満員である。つまり地方の中学卒業生は卒業後直に実業につくか、或は高等の学校に進まうとして東京其他の専門学校所在地へ出かけて、入学準備をするから、補習科の必要はないのだ、処が徴兵猶予の問題がやかましくなったから、今年から各府県立中学にも余程補習科が出来たやうだ。

○だから東京の中学補習科には、其中学の卒業生ばかりでなく、地方中学の出身者も多く入学して居る。中には専門学校へ入学しようとして、見事失敗して、逆戻りして居る者も多い、又徴兵猶予のために入学し居る者も多い。東京の中学補習科は落ち武者の集合所たる観がある。

(中略)

○東京中学は語学が割合進んで居るやうだ。他の学科は大差ない。これは東京には中学以外に英語研究所も沢山あるし、図書館もあるから、学校で難解の所は、いつでも教はることが出来るからであらう⁹⁾。

この論評では受験準備における地域間格差の問題が描出されている。受験準備を行うには東京へ出ることが必要であったことが分かる。もちろん補習科の実態については、実証的な解明を必要とする。しかし、現実問題として受験に対応するには東京の補習科での勉強が必要であったと考えられ

ていたことは確かであろう。また、地方でなく東京でなければいけないというが、中学校の補習科以外のさまざまな受験準備教育機関もそのほとんどが東京に設置されていたことを考えれば、受験準備教育機関に関する問題は東京という一地域に大きく限定される問題であったことも分かる。そして、自校の卒業生のみならず地方からの受験生を受け入れる補習科が「落ち武者の集合所」という点では他の種の機関と同列であるということにもなる。

これまで明治期における予備校に関する論評を検討したが、その中で徴兵猶予との関係が論じられている。それはこの時期の受験準備教育が、補習科を持つ中学校や私立大学（制度上は専門学校）に併設された予備校が担う部分も大きかったことによるものである。後の時期との関係から考えれば、徴兵猶予のメリットとの関係で予備校が論じられることは大きな特徴といえるだろう。

2. 大正期における予備校評

明治期にあってはいわば必要悪としての予備校というような評価であるが、それは徐々に変化していくことになる。以下に示すのは1914（大正3）年に出た予備校評である。

高等予備校は敗軍の将ばかりの集合所の如くに思はれるが、さうばかりとはいへぬ。九月入学期の学校に入らんとする中学新卒業生も勿論入学して居る。この九月を入学期とする学校の入学試験が遅くとも七月中には済んで、暑中休暇になるから、九月後の高等予備校は全く敗将ばかりになるわけである。然し九月からの高等予備校は、四月から七月頃までの如き満員の盛況を見ることは出来ぬ。

（中略）自宅に於て十分準備の出来るものは、是非に高等予備校に入るの必要もない。又地方から態々上京して自習の傍高等予備校に就いて修

学することに出来るものは、種種の点から得る所も多からう¹⁰⁾。

明治期と同じく「敗軍の将」という言葉が出てきているが、地方出身者に対して予備校での修学は「種々の点」で意味があるだろうという認識が出てくる。この認識が前章で検討した補習科の論評で指摘された東京の便利さとどの程度異なるものなのかは不明だが、大筋としては明治期のものと変化はない。

しかし、このような予備校に関する考えが肯定的なものへと変わっていくのである。以下に示すのは『大正五年版 新撰東京遊学案内』に「入学試験」と題された中にある受験準備法についての記述である。

入学試験準備方法は種々一にして足らざれども其重なるものを挙げれば巻中に掲げたる諸学校中入学試験準備に適応する学校を選択して入学するのが最良の方法である之に亜ぐものは独学自習にしてそは之に関する数多の書籍若くは講義録を研究することである入学準備学校とは高等予備学校諸英語学校及び数理科学学校等であるが尚ほ巻末に掲載する三百数十校の諸学校一覧をも参照せられよ¹¹⁾

ここでは受験準備の最良の方法が予備校への通学であることが明確に示されており、また学校案内書という性格もあり、具体的な学校の案内を見るよう指示までしている。そして予備校へ通うことは「寧ろ得策」なのではなく、「最良の方法」であるという評価もそれまでにはないものである。この段階になってそのような評価の仕方も存在しうる時期に到達したということになる。

受験について何らかの知識を持った著書が情報を集めて執筆する進学案内書と異なり、受験雑誌には受験生の体験談が掲載されることがある。体験談における予備校評はこの時期になって初めて登場するというわけでは

ないが、ここでは 1920（大正 9）年の『受験と学生』に掲載された体験談を検討したい。なお、この体験談を書いた恋濱という者は横浜高等工業学校に入学しており、高等学校受験生ではない。

△予備校万能は不可

諸種の専門学校の敗北者及び高等学校受験者は、今や如何なる方法にて受験準備すべきか、分別に苦しんで居られるだらうと思ふ。此の分別の如何が大いに及落に係するの、僕が此度痛切に感じたことである。今や予備校全盛時代で、猫も杓子も之に行きさへすればパスするものと思つて地方の者のみならず東京の中学を出た者でもどんどん予備校へ入る。そして友達の予備校に行かない者に向つて、実に予備校はいい為になる。自信がついたなどといひ、又実際自分でも自信がついてゐるやうに考へて居る。けれども実際に受験して見れば案外不合格になるといふ体の者が少くないことは事実である。これ予備校の大なる欠点である。

一体予備校といふものは、官立学校入学試験応募者に都合のいいやうにすべての学課が悉く配置されてあるのだから、自分に不必要な学科がある。その時間だけは遊んでしまはねばならない。一刻千金の受験準備時代にかかる無駄な時間のあることは実に失敗の一大原因となるのだ。又或る者はその空虚な時間に、自修室とか図書館等で勉強して居ればいいといふけれど、そんな時間に勉強したとて決して自分の力がつくものでなく、却つて自分の頭を害する源である。仮令自分の入学せんとする学校の試験科目のみ教へる予備校でも、その中には自分の好く教師と好かないのとがある。自分の好かない教師にはいくら講義を聞いても駄目だ。力がつくものではない。世界大戦は我が受験界にも影響して、之迄の予備校万能主義は一世紀後れたるの感がある。然らば今後の受験生は如何なる予備的学校に入りて準備すべきかは、順を追うて述べて見よ

う。

△今後の受験生の道

自分が諸君に是非お勧めするのは、数学なら数学、英語なら英語のみを教へて居る講習会等へ行くはいいといふ事である¹²⁾。

一見すれば予備校というものに対して否定的とも取れなくない論評であるが、全科揃っている予備校は高等学校受験生向けであり、専門学校受験者は科目別の講習会への参加を勧めているのだから、何らかの機関に通っての受験勉強という点では変わりはない。明治期においてはいくつもの予備校を渡り歩いたという体験談や複数の予備校に通ったものの挫折したというような高等学校受験者の体験談は存在したが、この時期にあって予備校のそのような利用法は専門学校レベルにまで波及しているということである。さらにそこで例示されている講習会をみれば、数学では日土講習会、日曜講習会、活用数学講習会、研数学館、英語では普及英語学校、国民英学会、正則英語学校、研修英語学校であり、これらは形式の差異こそあれ受験準備教育機関として認知されていたものである。この論評では、予備校の難点を認めつつも、科目に応じてよいものを適宜選ぶことでより効果的な受験勉強のあり方を述べているのである。いいところだけをつまみ食いしながら、学力の向上をはかっていこうという新しい予備校の利用法が言及されているといえる。

この時期になると予備校はもはや当然の存在のごとく扱われるようになる。以下に示すのは『大正十年度 東京学校案内』の「受験の準備」における予備校評である。

現在東京には高等予備校といった様なものや、英語、数学等を受験に適する様に速成に教授する所が数多く設けられてあつて、教師の中には、多年夫等の学校に教鞭を取つて居て、教授法の精錬に妙を得た知名

の士も少くないから、先づ夫等に入学して研究せられる方が得策であらう¹³⁾。

言及としては極めて簡単なものではある。しかし、予備校についての評価としてこれまでとは違う点がある。それはこの評者が「先づ入学して研究する」ことがよいと勧めている点である。もちろん受験指導に長けた講師がいることなどがあがっているわけだが、それ以上にこの評価は重要である。もちろん当時の予備校にも問題点はあったのであろうが、まずは入学することを勧めることができる状況が形成されてきたことを示しているのである。

明治末期から大正期にかけて多くの進学案内書に関わった人物に出口競がいる。彼が編集を担当した『一目瞭然 東京遊学案内』では、以下のような予備校評がみられる。

東京の有り難味は一つは此の予備校にあるとも申しませうか、此れは大抵の人が一度は厄介になるものであります。凡そ試験の中で、何が一番難しいかと申せば専門学校の入学については「英語・数学」の二つに止めを刺すであります。無論、物理、化学、国語漢文、地理歴史の類も難しいには相違ありませんが、何と云つても一番額にしわの寄るのは此の二つである。英語は今は世界語を以て目せられて居る位であるから、もう少し勉強したらよさ相なものであるが、なかなかよう行らない。此の学科を中心にどこの試験場へ出してもビクともせぬと云ふ勇気を練る、夫れが即ち「予備校」であります。

(中略) 京都、大阪にもそれがありますが、夫れ等は科学的に練磨されて居らない、受験準備機関としてはどうしても東京であります¹⁴⁾。

この案内書は1922(大正11)年に刊行された後、1926(大正15)年ま

で刊行され続けることになるのだが、どの年度のものにもこの文章が掲載されている。ここでも予備校はきわめて高い評価を得ている。予備校は「東京の有り難味」のひとつであり、予備校に通うことで「どこの試験場へ出してもビクともせぬと云ふ勇気を練る」ことが可能になるというのである。また、東京と他の地方との関係についても新たな側面が見られる。明治期にはあくまで東京に行かねば受験準備は難しいということが言われるのみであったが、ここでは京都と大阪を引き合いに出し、詳細は示さないもののその中身を考慮した上で東京がよいということを明言しているということである。

3. 昭和戦前期における予備校評

大正期において一定の評価を確立した予備校であるが、昭和期に入るとその評価にも変化がみられることになる。この時期は大正期に問題となった受験地獄はその問題性を維持したまま安定する頃でもある。そのような中で予備校はどのような評価を受けることになるのか。

以下に示すのは、伏見韶望という経済学士による予備校評である。

補習科

大抵の都会地の中学には補習科があつて受験本位の授業をしてゐる。そして又その成績が極めて良好であり、最も確実な受験勉強方法でもある。第一に営利的でなく生徒も少数なる為に先生と生徒の綿密はよく学科に興味を覚えしめる。それに先生も真に中等教育に理解をもつ人達であり、受験のコツも十分に心得てゐるから、完全なものとして諸君にこの補習科を奨める。遺憾ながら人員が定められてあるので誰でも入学出来ないのが欠点であらう。では入学出来ない人や、また不幸にして補習科のない地方の受験生はどうやるか、それはコツコツとやる傍、益々完備しつつある通信添削会に入会するも一策である¹⁵⁾。

伏見にあっては数ある受験準備法の中で「最も確実な受験勉強方法」としてこの補習科を高く評価している。その理由として営利を求めない少人数指導、中等教育への理解などをあげている。補習科自体はすでにみた通り、明治後期から設置されていた。しかし、この時期にきて予備校をしのぐものとして評価されているということは興味深い。すべての生徒が上級学校に行くわけでもなかった当時の中学校にあって、しかも通常の中学校としての仕事もこなさねばならない中学校の教員たちが「受験のコツも充分に心得てゐる」といえるのかどうかは疑問の残るところであるが、大正期にみられた予備校礼賛論とは異なる評価の仕方が登場したことを示している。そして、当然のごとく予備校に関する評価は厳しいものになる。以下に予備校と講習会に関する伏見の論評をあげておく。

予備校

近時都会の一流中学に補習科の設置に依り、加へて通信添削会の発展は必然的に予備校の存在を危ふくせしめた。その主なる原因は、営利的である為、収容人員の過多に依り講義の充分に徹底しない憾みがあるからである。又乱立に依る教師の質の低下にともない、受験界の權威と称する大家があまりに営利的な講義をする傍、自分の著書広告等をやり、澆刺さがなくなつて来た事が原因である。それではどこの予備校も良くないかと云ひば、まだまだどうして受験界の大家を集めて大いに活躍してゐるものが多数あるから、先生なり先輩の適當だと推薦して呉れた処へ入学することもよいであらう¹⁶⁾。

講習会

受験界の大家が休暇を利用して地方の都市へ出掛けて催すものに冬季夏季の講習会がある。最近では二流の新聞社にても行ふ。これは利用如何に依つては相当の力がつくものである¹⁷⁾。

この論評によれば、補習科や通信添削の発展により予備校は縮小を余儀なくされたという。いくつかの問題点は指摘されているが、それは営利的という点に集約される。ただ、「まだまだどうして受験界の大家を集めて大いに活躍してゐるものが多数ある」という認識も合わせて示している。よい予備校であればそれはそれでよいということなのであろう。しかし、「先生なり先輩の適当だと推薦して呉れた処へ入学することもよい」のであるから、まずは入学すればという大正期にみられた考え方からすれば慎重になっている。そして、地方の講習会については「利用如何に依つては相当の力がつく」という。受験界の大家が行うのであれば基本的には予備校と同じなのだが、そこは補習科の有無を含む東京と地方の格差を考えてのことなのだろう。

この補習科の台頭については他の論評でもみることができる。以下に示すのは序文で自らが受験指導に10年近くあたっているという和田道による予備校評である。

一. 予備校の選び方

予備校にもAクラスBクラスCクラス位までがある。Aクラスの予備校といふのは、評判がいゝので全国の各地から生徒が押し寄せて来るが、教室の設備が定員制度になつてゐて五百人とか六百人以上は採用出来ないことになつてゐる。だから採用試験がある。入学試験を受けようとして勉強するための学校に入学試験があるのだから考へて見ると変なものだが、かうして入れさうな優秀なる生徒を採用すると、益々合格率がよくなり、合格率がよいと評判がいゝので、採用試験によつて入れさうな優秀なる人のみを採用する。こゝで落ちた人は、今度はBクラスに行く、尚Bクラスで定員からはみ出すとCクラスに行く。Cクラスとなると、もう予備校とは名ばかり、広い何百人も入れる汚い教室に生徒を入れて、一世紀前に英語や数学を教へたといふやうな怪し気なる老

講師が立て板に水の如く、ドシヤ降りの如く講壇の上でまくし立てる。聞いてみると、一種の音楽的なリズムがあつて、快く耳には入るが、頭の中には何にも残らない。たゞ何かしら聞いたといふ程度である。それもまだいゝ方で、中には少しも聞えないで、たゞ騒音のみが安ラヂオみたいにガーガーと聞えるのもある。之が予備校の看板を掲げてゐるのだから、全く驚き桃の木である。だから予備校の選択は、通信添削会の選択以上に慎重でなければならない¹⁸⁾。

ここでは予備校の格差について触れられている。伏見の論評では予備校の中にはよいものもあるということが触れられていたが、ここではさらに具体性を帯びている。よいといわれている予備校には選抜試験があり、それに落ちた者は徐々に劣悪な予備校に通うことになるというのである。この時期すでに予備校に入るために選抜試験を通過しなければいけない事態に発展していたということが分かる。この選抜試験の厳しさがどのくらいによってこの論評の意味も変化してくるだろうが、予備校の中でも大きな格差が見られているということは確かであろう。このように注意した上で、その後に予備校を選択する上での具体的な注意点として、「(一) 講師の顔触れ (二) 教授法が規則的であること (三) 所在地について (四) 選択上の注意」をあげる。さらにその上で予備校の活用法に話が及ぶことになる。その内容は以下の通りである。

現在全国に約十万の受験生が居るとして、その中で真に予備校の講義がわかる人は何割位あるだろうか。親切に説明して呉れる講義がわからないのは、つまり地方の受験生の実力が、わかるところまで至つてゐないのだし、換言すれば合格の可能性がそれだけ乏しいといふことになる。全く実力のない人が、実力をつけようと思つて予備校に飛び込んでも、予備校には全国から受験生が集つてゐるので、程度が高く、少しも

授業と歩調が伴はない。勿論これでは何の得るところもないわけだ。

そこで予備校を利用する人は、予め基本的な知識をつけるか、若しそれがついてゐなければ、話を聞きながらも、自分の力で基本力を涵うやうに努力しなければならない。予備校へ通つてゐるのだから、参考書も教科書もやる必要はないと考へて、暇さへあれば、映画に行つたり、旅行に行つたりしてゐては何にもならない。

予備校へ行けば確かにそれだけの効果はある。先づ大勢の同志が集つてゐるので、非常に精神が緊張することゝ、若し模擬試験などでいゝ点を獲得すれば自信がつくことである。あゝあんな風にしたから俺は成績がよかつたのだなあと考へることによつて、それだけ目に見えない貴重な体験をしてゐることになる。然し又一方では予備校には妙に棄て鉢的な空気が流れてゐるのでそんなものに染り易い危険性もある¹⁹⁾。

ここで述べられる予備校の活用法はこれまでの時期以上に具体性を持っている。予備校に通う以上基本的な知識を身につけておくか並行してそれを身につけなければならないということ、他の受験生の存在による刺激、答案作成の訓練をすることの意味といったものである。これらの内容はこの時期になって初めてそう言えるという内容ではない。ただそれまで明言されることが少なかつただけのことである。そのような新しくもない活用法に言及した上で、「妙に棄て鉢的な空気が流れてゐる」という明治期にしばしばみられたような言及もみられる。そして、その上で中学校の補習科については以下のように述べている。

予備校に似て非なるものは、中学校の補習科である。これはどこでも一流の中学校なら設けられ、その学校の先生達が指導者になつてゐる。この補習科は、中学校の連続みあいであるから、最も規則的であり、利用如何によつては非常に効果があるが、こゝにも色々の欠点がある。

(一) 中学校の延長であるから、五年の在学で相当ウンザリしてゐるところへ、もう一年、その学校へ行くのかと思ふと、如何に受験とは言へ相當に嫌気がさして来る。

(二) 友人も先生も大抵知つた人達であるから、馴れ易く、刺戟性に乏しい。

(三) 地方の中学校には、受験指導に大して経験もなく、関心も抱かないが、たゞ自校に補習科があるために、義務的に教へてゐるので、教授法が少しも受験準備と一致しない。又実力のない先生もあつたりして如何に熱心に勉強しても実力がつかない。

等である。これを補ふためには

(一) 自分が今まで在学してゐた中学校とは異なる別の中学校の補習科に入ること。

(二) 都会地の一流校の補習科に入ること

等の方法が講ぜられる。東京府立中学にも補習科があつて、中には東京市民のみを入学せしめるといふ規定もあるが、全部ではない。そこで予備校へ入らず一流中学校の補習科に入つて実力を磨いてゐる人は相當に多い。

府立中学などは、無責任な、知識の切売式の教授はしないので、利用者の努力如何によつては予備校よりも有意義であるだらう。然し一流どころは入学試験があるから、その関門を突破しなければならない²⁰⁾。

補習科については馴れ合いが生じることや、受験指導としての的確性の問題についても言及している。しかし、伏見の論評と同様に、和田も府立中学の補習科に対して「無責任な、知識の切売式の教授はしないので、利用者の努力如何によつては予備校よりも有意義であるだらう」と肯定的な評価を下している。そして、予備校と同じ受験準備を行っている補習科を「予備校に似て非なるもの」とまで言うのである。予備校と同様に補習科

についても欠点は指摘しているものの、補習科という決して新しくはないが注目をあびることになった機関に好意的といえる。現に「都会地の一流校の補習科に入ること」が補習科の欠点を補う受験準備の方法として示されているのである。和田の評価を総合すれば、東京の予備校より東京の補習科ということになる。

さらに、欧文社の創業者である赤尾好夫の『入試突破の対策を語る』における予備校評を検討しておきたい。欧文社は、この時期すでに多くの受験参考書を出版していたし、またこの当時『受験旬報』（『蛍雪時代』の前身）という各教科の学習法などの記事を掲載した雑誌を出版していた。その意味では予備校のライバルでもある。彼の予備校評は以下の通りである。

最近予備校は、稍昔日よりも下火になった様である。それには種々の原因があろうが、第一は、何と云つても、費用が多くかゝるためであらう。果して翌年合格出来るか出来ないか判らない吾子を、最も変化し易い少年から青年への転換期に於て、親の膝下を離して多額の費用をかけて、監督者もない予備校に入れると云ふことは相当考へさせられることである。そして出来ることなら、家でゞも何とか勉強する方法がないものかと考へる。次に最近の予備校は一部を除いては大抵講師がほんとに御役目的に講義をするために熱が足りない。そして真剣に頑張つてゐる受験生には何となく食ひ足りない。時代が進んで行くのに予備校そのものは依然として旧態そのまゝで、一步も進歩しない所が多い。又最近一流の中学校には補習科が置かれる様になつて受験生は次第にルーズの予備校よりも厳格な補習科を選ぶ様な傾向になつたのである。

予備校の選択に當つて第一に注意すべきは、講師である。いくら校舎が良くても、経営者が手腕家でも、大切な講師からが講義が下手では問題にならない。近頃予備校では、努めて上級学校の教授の名前を列ねて

るが、上級学校の教授が必ずしも講義がうまいとは限らない。要はその本人にあるのである。次に、内容のしつかりした所でなければならぬ。他の学校の二階の一室をかりてゐる様な学校では設備だつて良い筈はない。教材にだつて金をかける筈はない。はなはだしい予備校になると百頁にも足りない薄っぺらのパンフレットを一円近くもとつて売りつける学校がある。次に経営者が真面目の人でなければならぬ。受験生なんぞと殆ど無関係の様な人が金儲けに、講師まかせでやる所は、どうしても時間通りには授業が行はれなかつたり、講師も無責任な講義をする様になる。学校に依ると授業時間になつてから十分も二十分もしなければ、出て来ない先生もある。こんなのは先生も悪いが生徒も悪いのである。そんな場合には、経営者に向つてドンドン抗議してもかまはない。時間が後れて来るのを良いことにしてワイワイ騒いでゐる様では受験生としての資格はない。予備校でも学校である以上、講師は時間通りに確実に出て来る義務があるし、生徒は出来得る限り先生の人格を尊敬して、静寂に傾聴する義務がある。学校に依ると先生はまるで講談師みたいにくだらない駄じやればかり飛ばして、生徒は生徒で、後方の半分は居眠りをしたり、先生の漫画を書いたり、甚だしいのになると煙草を喫つたりしてゐる所がある。実際こんな予備校なら世の中にない方が増しである²¹⁾。

赤尾もこれまでの2人と同様に補習科を評価している。「一流の中学校には補習科が置かれる様になつて受験生は次第にルーズの予備校よりも厳格な補習科を選ぶ様な傾向」が出てきたというのである。予備校については「時代が進んで行くのに予備校そのものは依然として旧態そのまゝで、一歩も進歩しない」との評価を下している。営利性の問題にも触れられてはいるが、この評価の仕方は新しい。ルーズな予備校は旧態であり、厳格な補習科が新たに求められる姿ということである。赤尾自身この一節の後に

自ら計画はしながらも作るにいたっていない予備校の理想像として、「講師は、全部専任で、校舎は郊外の健康地帯に十分な運動場等を持ち、勿論完備した寄宿舍を持ち、授業料も出来得る限り低廉にして、校則は中学以上に厳格にして、しかも十分に受験生の気分と云ふものを理解してなし単に学問を教へるばかりでなく徳育教育をもしろうと云ふのである」²²⁾と語っていることから、そのような構図の理解で問題ないといえる。また、この論評では予備校に通わせる親の苦労についてまで触れられている。金を出す側からすればきちんと指導をした上で合格という結果を出してほしいし、ましてその過程で挫折し、横道にそれるということは願わないであろう。お金を払って通わせる以上、きちんと毎日出席した上で勉学に励んでもらわなくては困るという発想のあらわれでもある。

おわりに

明治30年代頃に修業年限1年のものが出現するようになった予備校であるが、当初はその営利性を問題視され、いわば必要悪のようなものとしてしか評価されていなかった。それが大正期に入り、入学試験に臨むにあたり必要不可欠であり、また数ある受験準備法の中で最良の選択肢という認識が示されるにいたった。その後も受験準備法の中で中核的位置を占めては来たものの、昭和に入り、東京の中学校が補習科の運営に本腰を入れていく中で、補習科に比して営利的という評価が再び登場してくるようになった。以下、これらの変化の持つ意味について考察することにしたい。

大正前期は、入試制度も大きな変化もなく、高等学校数も8校のまま変化はなかった。逆にそれだけに入学試験の突破は厳しいものになりつつあった。1917（大正6）年の総合選抜制の再導入はそのことを端的に示しているといえるだろう²³⁾。そのような中で予備校が最良の受験準備法としての評価を得るということは、このような厳しい情勢の中で入学試験に合格するには、自宅において受験勉強にいそしむというやり方より他の機

関に通学するというやり方の方が、合格をより確実なものにできるという発想ができてきたと考えられる。つまり、予備校というところに通って、いわば強制的に勉強をするという状況を作り上げる方が、自分との戦いを強いられることになる自宅での受験勉強より確実ということであろう。このような精神的な問題もあるが、実質的な問題もあった。本論では十分検討することはできなかったが、当時の予備校が上級学校の教員を多く講師に迎えていたことは、予備校への通学はより高い合格率を保証するようにも映ったであろう²⁴⁾。また、大正期の論評で言及されることが少なくなったが、徴兵猶予の問題も影響したと考えられる。何年もの浪人生活が避けられない状況になる中、徴兵猶予の問題は決して小さな影響ではないからである。安心して受験準備を続けていく上で、徴兵猶予という特典は重要な意味を持っていたであろう。このように考えると、大正期における予備校の評価が高まるのは、いわば当時の状況から必然的にそうならざるを得ない中でのことであったといえる。

一方、昭和期において補習科の評価が高まってきた理由として、営利的でないこと、中学校が運営していることからくる規則性ということであった。このことは正規の学校に近いものが高い評価を得られるということでもある。この時期にきて、受験準備においても正規の学校と同様、規則的な通学が高い合格率を保証するという発想が出てきたことになる。その意味では独学と予備校への通学という2つが比較の対象として考えられていた大正期の予備校に対し、規則的な補習科とそうではない嫌いのある予備校という比較の中で予備校の評価が下されるようになったという変化といえるだろう。

また、この時期に東京の一流中学に補習科が設置されたということが補習科の隆盛の要因のひとつとして語られている。実際問題として昭和期に入って東京の一流中学がこぞって補習科を設置していたわけではない。たとえば府立一中は1921（大正10）年に補習科を設置しているという記述

が学校沿革史にある²⁵⁾。さらに、府立四中では高等学校が9月入学だった頃から補習科を設置し、1925（大正14）年より他の中学校の卒業生にも開放していたという学校沿革史の記述もある²⁶⁾。しかし、この時期になって敢えて補習科が称揚されるということは、中学校が卒業生の身の振りにまで責任を負うべきという考えが出てきたということではないか。試験に落ちて浪人をするのも本人の勝手と突き放してばかりもいられない状況が形成されてきたと考えられるのである。勝てば官軍という色彩の強い受験準備の世界に中学校的なもの、すなわち規則的な教育が導入され、それが支持を得るということは、有名な人を招いて知識を提供すれば事足りるというようなそれまでのやり方では、受験準備教育機関としては不十分ということにもなる。いふなればこの時期に受験準備教育の中に管理の発想が登場してきたということである。これは大正期にはなかった新しい発想である。また、この時期は学校における職業指導（進路指導）が始まる時期でもあり、中学校における進路指導との関係でも注目すべき点である²⁷⁾。

予備校に関する論評を検討していくことで、受験競争が厳しくなる中で予備校が必然化し、その後補習科が注目されていく中で規則的に生徒を管理できるものが評価されてくるというひとつの流れをみることができる。しかし、この流れは言説を追っていく中で見えてきたという意味でまだ仮設的見解の域を出ない。本論を展開していく中でさまざまな実証を要する課題が出てきている。それらの課題を実証的に克服していくことが、この見解を裏付けるために必要になろう。その点については今後の課題としたい。

註

- 1) 受験準備教育機関は強制的手段で排除することすら可能である。韓国で1980年に出された「教育正常化のための課外取締り施行指針」（塾や家庭教

師による課外授業を禁止)のような事例も存在する。しかし、そのような手段をとってもなお、表に見えない形で課外授業が展開されていたことは注意しておく必要があるだろう。

- 2) ここでは近代日本の予備校を通観できる研究のみを以下に提示しておく。
 関口(小金井)義「各種学校の歴史①・②・⑥・⑬」『各種学校教育』第1号・第2号・第7号・第19号(1964-1966・1968)
 関口義「わが国に於ける予備校の発達過程とその展望」『天王寺予備校二十年史』(天王寺学館, 1974)
 佐々木享「大学入試の歴史(第37回-第39回)」『大学進学研究』第78-81号(1992-1993)
 吉野剛弘「近代日本における予備校の歴史」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第48号(1999)
- 3) 菅原亮芳「近代日本私学教育史研究一大正期刊行の「進学案内書」の書誌的分析を中心として一」『日本私学教育研究所紀要』第36号(1)(2000), p. 2
- 4) たしかに予備校に関する論評が出はじめるのは明治30年代後半あたりからのことなのであるが、それはこの『中学世界』の雑誌としての性格の変化も大いに関係する。この点については、教育ジャーナリズム史研究会編『補遺収録誌一覧 各誌解題 執筆者索引 所蔵機関一覧』(教育関係雑誌目次集成 人間形成と教育編 第33巻, 日本図書センター, 1992) p. 36の菅原亮芳による解題を参照されたい。
- 5) 「入学試験の今昔」『中学世界』第9巻第4号(1906. 3), p. 64
- 6) P. P. P.「受験学生の巢窟」『中学世界』第10巻第12号(1907. 9), p. 83
- 7) 「高等予備校」『中学世界』第11巻第8号(1908. 6), p. 181
- 8) 高橋都素武『全国学校案内』(内外出版協会, 1908), pp. 276-277
- 9) 島溪生「東京中学と地方の中学」『中学世界』第10巻第8号(1907. 6), p. 73-74
- 10) あこがれ生「都下の高等予備校」『中学世界』第17巻第4号(1914. 3), pp. 109-110
- 11) 集文館編『大正五年版 新撰東京遊学案内』(集文館, 1916), p. 3
- 12) 恋濱「予備校よりも講習会」『受験と学生』第3巻第10号(1920. 10. 1), p. 67
- 13) 芳進堂編『大正十年度 最新東京学校案内』(武田芳進堂, 1921), pp. 15-16
- 14) 出口競『一目瞭然 東京遊学学校案内』(大明堂書店, 1922), pp. 90-91
- 15) 伏見韶望『新制度準拠 受験必勝対策法』(教材社, 1938), pp. 39-40

- 16) 同前書, pp. 40-41
- 17) 同前書, p. 41
- 18) 和田道『入試対策の新指導』(研究社, 1939), p. 59
- 19) 同前書, pp. 62-63
- 20) 同前書, pp. 63-64
- 21) 赤尾好夫『入試突破の対策を語る』(欧文社, 1940), pp. 157-159
- 22) 同前書, p. 159
- 23) この時期の入試制度については, 吉野剛弘「大正前期における旧制高等学校入試—入学試験をめぐる議論と入試制度改革—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第 53 号 (2002) を参照されたい.
- 24) 明治から大正にかけての予備校の講師の問題については, 吉野剛弘「明治後期における旧制高等学校受験生と予備校」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第 51 号 (2000) を参照されたい.
- 25) 日比谷高校百年史編集委員会編『日比谷高校百年史』上巻 (日比谷高校百年史刊行委員会, 1984), p. 127. しかし, 文部省普通学務局編『全国中学校ニ関スル諸調査』によれば, 1921 (大正 10) 年 10 月 1 日現在で補習科の存在が確認できる.
- 26) 百年史編集委員会『府立四中都立戸山高百年史』(百周年記念事業実行委員会, 1988), pp. 104-105. しかし, この補習科については前出の『全国中学校ニ関スル諸調査』で確認することはできない.
- 27) この時期の職業指導の実践としては高等小学校のものが注目されることが多いため, 現段階で中学校の進路指導との関係について一定の見解を出すことは難しい.